



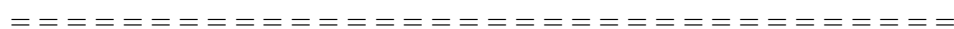
地域日本語支援ニュース こだま 第 310 号

2017.1.12



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



■世界の年末年始 その2 ■

期待と希望に溢れるはずの新年ですが、2017 年はトルコでの悲しい事件で幕開けとなりました。世界中の人たちが新しい年を笑顔で迎えられる日が来ますように。平和への願いを込め、本年第 1 号では昨年に引き続き、各国で祝福とともに受け継がれてきた年末年始の行事を AJALT 会員がご紹介します。

◆シンガポールのお正月 ～春節～

複合民族国家であるシンガポールでは、中華系、インド系、マレー系のそれぞれの祭日を祝います。中でも、国民の 7 割以上を占める中華系の正月（春節）が近づくと、巨大な干支の人形が迎えるチャイナタウンを中心に、新年の準備をする人々で国中に熱気があふれます。日本のお歳暮のような習慣もあり、「ハンパー」と呼ばれるそのギフトは、お菓子や缶詰、干し椎茸等々ですが、どれもピラミッドのように豪勢に高く積み上げた形で売られています。

元旦になると、親族や知人の家を年始の挨拶で訪れますが、その際に、家庭の主婦は、訪問する先の主婦にみかんを二つ手渡します。これは、みかんを黄金の玉に見立てたもので、「お宅に今年もお金が貯まりますように」という願いが込められています。訪問先から帰る時には、そこの主婦が同じように、みかんを二つ渡します。「お宅にもお金が貯まりますように」という願いのお返しです。この、みかんを持ち運ぶための赤いきれいな紙袋が、春節前にはたくさん売られています。赤い袋と言えば、「紅包（アンパオ）」と呼ばれるお年玉を渡す習慣もあります。日本ではお年玉は子どもに渡すものですが、シンガポールでは、未婚の人に渡すものとされています。会社で上司が部下に渡したり、日

頃お世話になっているお手伝いさんに渡したりもします。「紅包」には新札を入れるので、年末の銀行には、新札両替の特別カウンターが設置されます。

そして、シンガポールの春節に欠かせない料理が「ローヘイ」と呼ばれるお刺身入りのサラダです。「ローヘイ」というのは、漁師が魚を釣り上げる動作をいうそうで、大皿に盛られたこの料理を箸で高く持ち上げながら、「ローヘイ、ローヘイ」と皆で唱えて食べます。これにも「お金に恵まれますように」という願いが込められているのだそうです。

(宮下記)

◆ポーランドのクリスマス

ポーランドの第4番目の市、ドイツとの国境近くにあるヴロツワフ（ドイツ名ブレスラウ）では、市庁舎のある旧市街の広場に、クリスマスマーケットが立ちました。子どもたちには小さいメリーゴーランドが用意され、大人たちはグリューワインをすすって、体を温めます。でも華やかな気分は23日には終わり。それからは告解の順番を待つ人で教会は溢れます。

クリスマス当日は街は真っ暗。皆、家でクリスマスを祝います。クリスマスの食卓には、余分ないすが一つ、キリストのために、旅人のために用意されます。食卓には、筒切りの鯉のフライが……鯉こくでもない、あらいでもない鯉は初めてで、口の中は小骨だらけで味はわかりませんでした。「クリスマスおめでとうございます」と口々に言うのですが、「ヴェソウイエフ シフィヨント」と覚束ない発音で言うと、皆たいそう喜んでくれました（ちなみに、「新年おめでとうございます」は「シュチェンシリヴェゴ ノヴェゴ ロク!」というのですが、手のひらに書いておいても大変でした）。

文字通りのホワイトクリスマス、あの、凜とした寒い寒い日を懐かしく思い出します。

(中村記)

◆カチン民族の新年

ミャンマー北部の山間に暮す少数民族カチン族出身の女性から、故郷のお正月の話を聞きました。

12月31日の夜は、大人も子どもも教会に集まります。牧師さんのリードで最初に讃美歌を歌い、それからお祈りをします。12時を過ぎ、1月1日になったらみんなで握手をします。そしてカチン語で「新年おめでとう、今年もお元気で」と挨拶をします。

それから皆でパパを作ります。パパというのはカチンの伝統的なお餅です。お父さんたちがお餅をつきます。皆で「イッショー、イッショー（カチン語）」と元気に掛け声をかけながらつく様子は、日本のお餅つきにもちょっと似ています。味も日本のお餅に似ていますが、油と塩とゴマが入っていて、もう少しこってりしています。子どもたちは皆、つきたての温かいお餅が大好きです。お餅を食べた後は、教会の牧師さんが考えたいろいろな遊びをします。そして皆で火を囲んで、おじいさんやおばあさんが話してくれる昔話に聞き入ります。この日は大人も子どもも、誰も寝ずに夜通し過ごします。

元旦の朝が明けたらマラソンをします。1等から3等までに入賞した人は石鹸がもらえます。私も参加したことがあります。残念ながら石鹸はもらえず、足も痛くなりましたが、思い切り走って楽しかったです。

日本にいても、この季節になると、みんなで過ごした故郷の新年を思い出します。

（小瀧記）

◆インドのヒンドゥー教の新年 ～ディワリ～

窓の外では花火の音が鳴り響いています。日が暮れて間もなく始まりました。明日の日曜日（11月7日）はいよいよヒンドゥー教の最大のお祭り、ディワリです。家の周りにろうそくを灯して、神様に捧げます。以前マレーシアにいた時、インド人達がこのお祭りをするというのを知って、「どんなに幽玄なものなのだろうか」と想像を膨らませましたが、実際に見る機会はありませんでした。

今週の街はとても盛り上がっています。丁度、日本のお正月を迎える雰囲気といったらいでしょうか。日本の暮れのあの寒さと年末のあわただしさはありませんが、買い物をしている人々の表情や活気溢れる街の空気にそれが感じられます。

一番多く目に付いたのが、ディワリの時に飾る色々な種類のろうそくや油を入れて火を灯すための小さい土器やヒンドゥーの神様に捧げる品々などを売っている店です。いつも昼食を食べに行く飲食店の混雑ぶりも大変でした。ここは100人以上座れる広い店ですが、普段テーブルと椅子が並んでいる場所は、全て菓子作りの作業場と化して、食事は外でするようになっていました。作っているのはインドの大変甘いお菓子です。甘党の私もそんなには食べられないという甘さです。これを友人や親戚に配ります。

果物屋も大繁盛です。店の前の路上にまで数々の果物を並べて贈物用の籠の盛り付けに追われていました。今は果物が少ない時期ですが、林檎、蜜柑、パ

パイア、グァバ、葡萄、バナナなどが楽しませてくれます。

また、ディワリの時に冷蔵庫やテレビなどを買いかえる習慣もあります。この日の為に1年かけて貯金をして、貧富の別なく必ず何か新しい物を買うそうです。私は小さい土器に入ったろうそくを60個ほど買いました。明日の晩、庭の塀の上に飾ります。

5月には44℃という熱気に包まれたデリーでしたが、半年経った今はすっかり秋の気配です。日中はまだ33℃ありますが、先月の中頃から朝夕は18℃位になりました。勿論、夜はエアコンは要りません。道路の両側に続いている大木に葉は茂っていますが、さすがに元気がなくなり枯葉が目立ってきました。その下では、焼き芋屋が店開きをしています。「気温が下がってきたな」と感じ始めた頃から空気の汚れが気になるようになりました。毎朝 India Gate(インド門。第一次世界大戦で戦死した9万人のインド兵士の慰霊碑、高さ42m)の前を通りますが、すぐ近くで見ても霞んでいる日もあります。

ディワリが済むと、やがて「スモッグと霧と寒さの“冬の三重奏”」のイントロが聞こえて来ます。

(ディワリの前日に 立花記)
